

短歌部門：講評

審査委員：歌人 黒瀬珂瀾

第8回超然文学賞の短歌部門では全国から29編の応募がありました。再挑戦の方、継続して応募下さる高校の方なども見え、超然文学賞が短歌を志す高校生の皆さんにとって、ひとつの目標として定着しつつあるのだと実感し、嬉しく思いました。

今回も多様な作品を拝見しました。15首全体で主体の世界観などを伝えようとする、意欲的な構成の作品が目につきました。それはつまり、一つの挑戦なのでしょう。多様なメディアや娯楽が飛び交い、スマホからは無数無限の動画があふれる現代にあって、この小さな、ささやかな短歌という詩形にいかなる可能性があるか。その挑戦と模索の跡を、皆さんの作品に見た気がしています。

ですから、ちょっとアドバイスを。15首というのは少なく聞こえますが、やはり多い。前半は良い歌が並んでいても、後半になると失速してしまう作品がままありました。15首をしっかりと作り切るには体力と時間が必要です。制作にはできるだけ早めに取り掛かり、たっぷり時間をかけるのが大切でしょう。

また、皆さんの作品からは、過去の受賞作や選評などをきっちり読み込んだ様子が見えます。それだけ超然文学賞が回を重ね、蓄積ができたということでしょう。ですが、過去作から学ぶ要素が、大勢の作者に共通する、いうなれば「最大公約数」的な表現であるなら残念です。今回は全体を通して、作品世界が小さくまとまる傾向がありました。例えば、様々な事物を精緻に「写生」してそこに作者の感情を託すという方法は非常に有効ですが、それが構図的というか「お約束」になってしまうと、生のダイナミズムがかえって削がれてしまいます。そういう万人受けする要素よりも、受賞作それぞれに必ず存在する、その作者ならではの特異な、独特な、破天荒な点を感知できる読解力を養ってください。それを読み取れる人は、誰にも真似できない自身だけの表現を掴み取ることができます。自分の姿は、訓練しなければ自分にも見えません。他者の良い点、とがった箇所を見出し、受容すること。それが己の作歌にも大切になります。

そしてその過程が、自分とは違った価値観や環境の人を疎外し、迫害し、差別してしまう現状を克服し、真に人間が互いに尊重し合って生きる社会の模索に繋がるのだと、私は信じています。

今年の短歌部門の最優秀賞には福田^{たくと}匠翔さんの「一段と高く」が選ばれました。どの歌も大変上手く、修練が見て取れました。その文体の力が、最優秀賞に選ばれた大きな要因でしょう。

なんか僕ら楽してるよね 南天の実のあかあかと雪に散りおり
この一首は実に鮮やかで、現代口語調短歌の成果をしっかりと習得しているさまが感じられ

ます。安定しない己の生のふわふわした焦燥感、言語化するのが難しい感覚をヴィヴィットに捉えました。色彩が印象的な下句の描写は、自分にはないもの、つまりは、凜とした生の輝きへのかすかな憧憬を思わせます。

窓際に積んだりんごのあいまいなバランス冬の日差しの中に
吐く息があまりに白い 君のいるはずの電車を待っている朝
一言を聞き返すことためらえば噴水のまた一段と高く

かすかな陰影を追い求め、そこに小さな安息を見出す。そんな弛緩と緊張感が錯綜する感覚が高く評価されました。そして、背後に静かに流れる相聞の心、誰かへの思慕が作中に清らかな灯りをともし。「オーデン」や「マリー・アントワネット」など人名の使い方も巧みでした、どうぞ今後も短歌を通して、世界の先を見定めていってください。

優秀賞の一作目は森岡千尋さんの「見つめる」。静謐さに満ちた作風で、応募作の中でも鋭敏さは突出していました。この作者ならではの独特な性質です。

バス停で何度も踏まれたハンカチに印刷された桜の蕾
換気扇の中で絡まる少年の嗚咽を知らないふりする夕日
菜箸の先が居場所を探してて秋刀魚の銀の瞳目が合う

センシティブな心のありようを景に託してゆく。その修辞が自在で、時代精神を受け止めています。一方で、繊細過ぎるのでは、という懸念もありました。生の大らかさをいかに取り込むかも、ひとつの課題となるでしょう。

木漏れ日の中に落とした輪郭を縫うようにして鉢植えの影
この「縫う」はなかなか出てくる言葉ではありません。今後に期待します。

優秀賞の二作目は佐藤みちるさんの「クリームイエロー」。観察眼の鋭さ、たくましが評価されました。良い歌が多いと同時に、もう一步の歌も多かった。一首一首にさらにじっくり向き合えば結果は違っていたかも……。

現生に生まれてこれでよかったと思う 他人の猫を愛でつつ
この一首、まことに秀逸です。時代を渉りゆく詩の力を感じます。

暑さから逃れるために父親の陰に入った頃も忘れて
止まる気のない焼き芋屋追いかける アキレス腱をほどよく伸ばす
アイロンがかけられたシャツ この世には愛が多くて気づかれにくい

生の実感と、成長してゆく〈私〉の存在が色濃く表れます。堅実な生命観が作品を下支えしています。

佳作にはまず水野結雅^{ゆうが}さんの「重力」。旧かな表記、文語調で頑張ってくれました。まずそこに強く喝采を送ります。そして、独自の詩情で世界のダイナミズムを掴み出す力のある

作者です。

蒲公英を脇に避けゆく君の靴に踏まれし草のあをの濃きかな

人間は塔を欲してゐるらしくガザ侵攻の真黒き見出し

雄渾かつ精緻な描写に満ちた一連で、たまに言葉が過ぎる歌もありましたが、世界を見つめ続けることの誠実さを受け取りました。

大渦を湧き起こせさうな太腕に鯛引つ提ぐる島の先生

旧かなと荒々しい口調がうまく合致した、力強い一首です。どうか今後も己の文体を練磨し続けてください。

次に佳作の東野礼豊^{らいと}さん「しゃっくり」。とても面白い一連で楽しく読めました。この楽しいというのは大切な感覚です。ただ、ちょっと表現が大づかみかも、との懸念もあり。今後の研鑽に期待です。

スヌーピーの黄色いやつの名を忘れひとつも好きなものがない世界

きちきちと紙箱に収まってゆく辞典に性の言葉もすこし

一首目、ウッドストックですね。黄色い小鳥。作品に社会批評性があり、広い観点がよく活きた一連でした。

点字ブロックをまたぐとき人類はスーツケースをふっと持ち上げ

この「人類」はすごい。世間をじっくり見渡せる人ならではの修辞です。

佳作のもう一作は植木光太郎さんの「風が吹く」。清新な抒情が好ましいです。

春風を受けて瞳を閉じたとき僕があなたである可能性

星の降る夜にプールへ忍び込みベガとデネブを泳いで渡る

一首目の彼我が混在してゆく感覚、とても良いです。二首目もおそらく空想の景だと思いますが、発想が実に優美です。現実と幻想のあわいに立つ詩情は実に貴重。ただ、全体的にちょっとメロウさが過ぎたかも。メリハリの付け方を学べば、さらに深い作品となるでしょう。

星々や君が存在することは眠くなるほど遠くに光る

作者独自の甘やかな感覚を活かしつつ、様々な表現も模索してみてください。

先にも書きましたが、現在は高度に発達したメディアが私たちを幾重にも取り巻いています。視覚偏重、ヴィジュアルイメージが優位であり、本を読むより動画を見ることが多い時代です。超然文学賞の応募作も、視覚情報に偏った作品が多いようです。シチュエーションを映像的に想像し、それを言葉に直した作品がどうしても多くなる。しかし、人間の感覚は視覚だけではなく。味覚、嗅覚、聴覚、触覚……。若い皆さんには、五感をフルに活用して、この世界と向き合っていただきたと思います。